

# 心筋梗塞入院記



# 目次

<a href="#">この本について</a>	2	<a href="#">2007年2月13日(火) 大部屋へ移動</a>	21
<a href="#">凡例</a>	2	<a href="#">2007年2月14日(水) 点滴の終了</a>	22
		<a href="#">2007年2月15日(木) リハビリ第三段階</a>	23
		<a href="#">2007年2月16日(金) お礼のメッセージ</a>	24
		<a href="#">2007年2月17日(土) 次の手術と退院の予定</a>	26
		<a href="#">2007年2月18日(日) 見舞い</a>	27
		<a href="#">2007年2月19日(月) 手術の予定が延期</a>	28
		<a href="#">2007年2月20日(火) 再手術は再延期</a>	29
		<a href="#">2007年2月21日(水) 再手術</a>	30
		<a href="#">2007年2月22日(木) 退院確定</a>	31
		<a href="#">2007年2月23日(金) 退院</a>	32
<b>第1部 発症前日まで</b>			
<a href="#">心筋梗塞について</a>	4		
<a href="#">最初の自覚症状(2005年頭:39歳)</a>	4		
<a href="#">地元の病院に相談(2005年2月:39歳)</a>	5		
<a href="#">人間ドックの黄信号(2005年秋:40歳)</a>	5		
<a href="#">人間ドックの赤信号(2006年秋:41歳)</a>	6		
<a href="#">循環器の再検査(2006年秋:41歳)</a>	6		
<a href="#">J病院の問診とドロップ(2006年12月:41歳)</a>	6		
<b>第2部 入院</b>		<b>第3部 最終手術と、その後</b>	
<a href="#">2007年2月8日(木) 前日の容態悪化</a>	10	<a href="#">退院後の生活</a>	36
<a href="#">2007年2月9日(金) 緊急入院</a>	11	<a href="#">最終手術の予定</a>	36
<a href="#">ERに自分の足で歩いて入る</a>	13	<a href="#">2007年3月7日(水) 最終手術</a>	37
<a href="#">手術</a>	14	<a href="#">2007年3月8日(木) 入院中</a>	38
<a href="#">ICUへ</a>	15	<a href="#">2007年3月9日(金) 退院</a>	39
<a href="#">入院の報告</a>	16	<a href="#">退院後のダイエット</a>	40
<a href="#">熟睡できない夜</a>	16	<a href="#">結婚指輪を詰める</a>	41
<a href="#">2007年2月10日(土) ICUから個室へ</a>	17	<a href="#">オタク合コン設定おじさん</a>	41
<a href="#">生還報告</a>	18	<a href="#">ブラック企業への転職</a>	42
<a href="#">2007年2月11日(日) みんなの声</a>	19	<a href="#">リバウンド</a>	42
<a href="#">2007年2月12日(月) 個室で静養</a>	20	<a href="#">その後の経過</a>	43
		<a href="#">謝辞</a>	44

## この本について

本書は筆者が2007年2月に心筋梗塞で入院してPCI手術を行ったときの体験を、当時のmixi日記（友達の友達まで公開）の記録をもとに、改めてまとめておくことを意図しました。

PCI=経皮的冠動脈手術。開胸をせず、カテーテルを通して血管内を処置する手術のことです。身体にメスを入れるわけではないので、身体への負担は本書のように軽いものです。

mixiに投稿（多くは妻の投稿）した部分については、原則としてそのまま掲載します。さらに現在の筆者と妻が記述している部分は、それとわかるように以下のように表記をしました。

## 凡例

本書は当時のmixi日記を、自分と妻が回想しながら記録していることから、それぞれの記述は次のように表記して区別しています。

このように何も囲っていないのが、現時点の筆者が記しているものです。

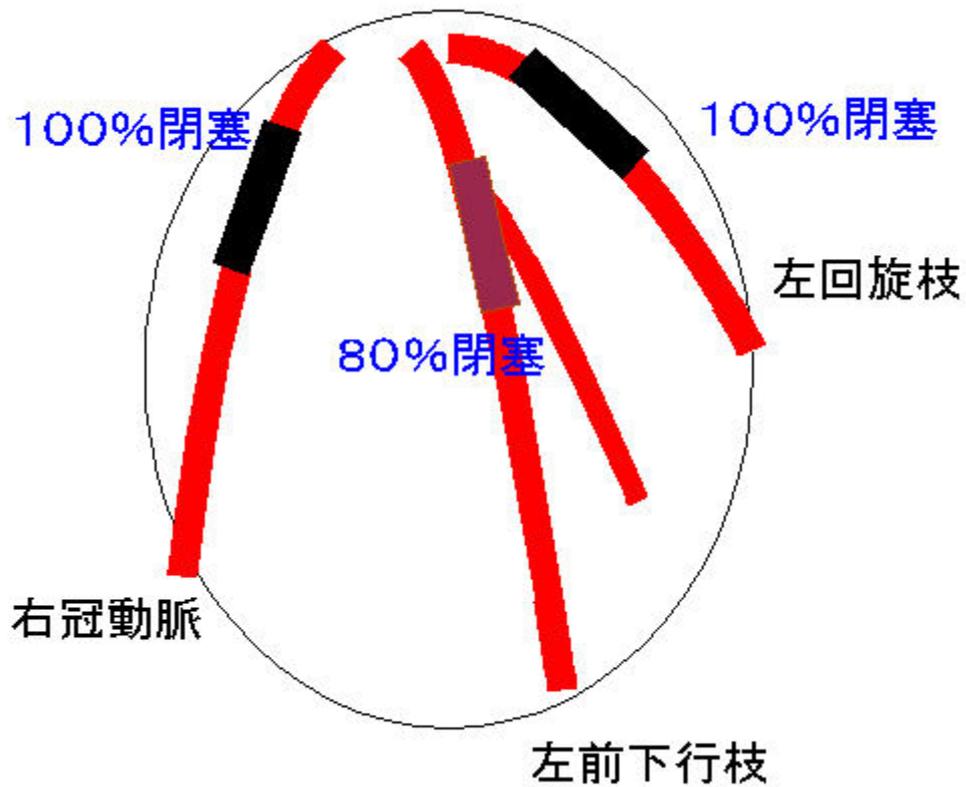
このように一重枠に囲っているのは、現時点の筆者が記しているものですが、特に本文と区別をつけたい注記の類の部分です。

このように二重枠で囲っているのが、当時のmixi日記のもので、文字も少々小さめにしています。

このように影付き枠に囲っているのが、現時点の妻が記しているものです。さらに冒頭に（妻コメント）というお断りを入れています。

# 第1部

## 発症前日まで



入院時の心臓の状態。これでは心臓にまともに血液がいかない、かなりヤバイ状態であったことが分かります。

退院直後に自分で描いた図ですが、ちゃんとした図はネットなどで探せるので、あたってみてください。

## 心筋梗塞について

正確には専門記事を読んで欲しいのですが、心筋梗塞は「心臓の血管が詰まって機能不全を起こす」という「虚血性心疾患」の一種です。そのうちでも血液の巡りが悪くなり機能不全になり始めるのが「狭心症」であり、血管が完全に詰まってしまって心臓に血液が行き渡らずに心臓の筋肉組織が壊死を始めてしまうのが「心筋梗塞」です。

心臓の血管が詰まる原因としては、いわゆる「ドロドロ血液」などと言われる、悪玉コレステロールの量が問題視されますが、それだけが直接要因とも言い難いものがあり、実のところは**遺伝的要素**が強いとも言われています。

そして実のところ自分の両親は両方とも狭心症を発症して過去に手術を受けていました（笑）。だからこそ、自分も自覚症状が出た際には「やっばこれ、アレだよな」ということで、比較的早期に自分から病院に行けたと言えなくもないのではあります。

## 最初の自覚症状（2005年頭：39歳）

当時の日記に特に正確な記録は残していなかったのですが、2004年の秋から2005年の冬にかけて、自覚症状が出始めていたようです。

具体的には、朝の通勤時に駅まで自転車に走らせていると連続5分を越えた頃になると、あるいは当時の客先の通勤の「ゆりかもめ」への移動に新橋駅内を徒歩移動している際に**左の肩から背中がきゅーつと痛む**ようになりました。これらは動くのを止めて数分すると、おさまります。これは程度の差はあれ、だいたい毎日のように発生していました。さらにこの頃から**酷い左肩の肩こり**に悩まされるようになりました。

何もしていないと徐々にコリがたまって、もみほぐさないと痛くてしかたがなくなる感じでした。また夜に寝ている時に、左手がわずかな**痛みと痺れ**でままならないようになったことも時折ありました。

## 地元の病院に相談（2005年2月：39歳）

さすがに気になってネットで調べ「あるいは、これが狭心症なのか？」と思い至ったため、2005年2月に地元駅前のHクリニックを受診しました。

しかしこの時には測定時には痛みは特になく、心電図でも異常は発見できませんでした。もっともここには循環器科はなく、運動負荷試験の設備も特になかったため、これ以上の調査はできませんでした（本当は運動負荷試験をして貰いたくて行ったのですが）。

今にして思えば、ここで循環器科のある坂本病院に行っていたら、と思わないでもなく。

しかしそれでも「とりあえず」ニトロペンを処方して貰い、「痛かったら飲むように」と言われました。しかしながら基本的に薬を常用することは好まなかった当時の筆者は、基本的には多少痛んでも飲まずに、単に我慢して済ませていました。実際にはニトロペンには習慣性などはなく連用しても効き目が落ちることはないらしいので、これはまったく無意味な我慢であったことが後に判明しました（笑）。

## 人間ドックの黄信号（2005年秋：40歳）

30歳・35歳に受診した人間ドックも、40歳になって毎年行くことになりましたので、ここで狭心症の疑いのあることを相談します。ただしこの結果、それまでは過去にここで受けていた**運動負荷試験を受けさせて貰えなくなる**という顛末になりました。本当はここでこそ検査で異常を発見して欲しかったのですが、なんだかなあ。

人間ドック側の論理としては、狭心症の疑いのある人間に運動負荷試験を行って、その結果として発作が出たら責任が取れないということなのでしょう。この本末転倒感。

それはそれとして今回の人間ドックの結果として**左手の握力が右手より異常に低い**事実が指摘され、また「高脂血症」も判定されました。

しかし結局、それから自分は何をどうするでもなく日々の生活を続けました。人間ドックで循環器の再検査の紹介をされるも、スルーします。

## 人間ドックの赤信号（2006 年秋：41 歳）

そして何も対策を取らずに 1 年。翌年の人間ドックでは、さらに状態が悪化していました。

- ・引き続き、高脂血症
- ・引き続き、左の握力が低下
- ・**脂肪肝**の疑い
- ・**心臓が肥大**している模様
- ・尿に潜血反応

危険な兆候が増えており、再度「循環器」が要再検査になりました。さすがに危機感を抱く自分。さらに尿の潜血から「泌尿器科」も要再検査になりました。

泌尿器科の方は、一応別の病院で再検査したものの、不明というか無関係というかで、現在に至るまで特に何もしておりません。

## 循環器の再検査（2006 年秋：41 歳）

前回の H クリニックが空振りだったので、今度は新小岩でも「循環器科」がちゃんとある坂本病院を受信しました。今度は運動負荷試験もちゃんと受けました。

結果は「もっとちゃんとした所で精密検査を受けた方が良い」とのこと。

「ちゃんとした所」として都立墨東病院と私立 J 病院を紹介できる、と言われるも、当時墨東病院の名前は知らなかったので J 病院の紹介状を書いて貰いました。

## J 病院の問診とドロップ（2006 年 12 月：41 歳）

坂本病院の紹介状を持って、J 病院に赴きました。

医師の所見の前にまずレントゲンなどを行い、かなり待たされました。

そして実のところ、ここで当たった医師の対応が割と酷いものであったように思えます。

まず話の頭に、こちらが差し出した人間ドックのデータを、医師がまともに受け取らずに**一瞥もせず**に興味を示しませんでした。基本的にはこの初手で、早くもこちらの印象は最悪になりました。

理由はいまでも不明。自分の所で取る/取った最新データを優先するという事なのかもしれませんが、普通に症状を見るための基礎データだと思うのですが。

ここで再度の運動負荷検査の類を行うことも期待していたものの、それも行わず、ただの問診で終わり。私としてはなんら進展はない感触。

医師からは「あるいは血液をサラサラにする薬を処方する手もあるけど」と言われるも、この時点では薬を毎日常用することに抵抗があったので、あまり良い答えをしない私。

この時点では、私も病状をまだ甘く見ていたと言えは言える。

さらに先方は、ともあれ現状を把握すべきだろうと「検査入院」を勧めてくる。

いい加減にこの毎日の鈍い苦痛から解放されたかったのでそれ自体には異存はないものの、これは当日を挟んで3日ほど入院の必要があるとのこと。

そこまで仕事を休んでしまうのはなあ、ということではささかここで躊躇する自分。

ただし後の墨東病院への入院経験から、この日数はまあ妥当で、これは誤った処方とは言えないと判明。つくづく最初の悪印象による信頼感の欠如が響いたとも言えなくもない。

ちょうど12月でもあり、当時の会社での勤続10年の5日間のリフレッシュ休暇も取得できるので、それでは年末年始ではどうでしょう、と打診すると「年末年始はすでにもう無理」とのこと。

結局は、年明けに一度「検査入院の日を決めるための受診」のために、改めてこの病院を訪ねてこの医師と話さねばならないということになる。なんだかなあ。

加えてその時点にならないと「検査入院のためのベッドが空くかどうかは分からない」と言われる。なんだかなあ。

そしてその際に医師に「**差額ベッド**ならすぐ空くけどね」と言われたため、ここで内心ブチ切れて「もういいよ！」と思う。

ただし後に墨東病院に入院経験して、確かにいかにベッドの確保が慌しいかはよく分かったので、これもあながち金儲け主義の発言ではないとは後に分かるのだが…。

結局、その場で担当の看護師と年明けの予定を入れたものの、これは当日にキャンセルの電話を入れることに決めて、事実そのようにしました。

こうしてJ病院との関係は、ここでドロップして終了となりました。

結果論から言えば、ここで検査入院していても2ヶ月早く手術をただけの結果に終わったとは思いますが。でも多分、治療費はさらにもう数十万円（あるいは三桁）余計に払ったとも思うな（笑）。都立と私立の違いがあるし「差額ベッド」だったかもしれんし。

そして結局、それから左肩の酷いコリと、自転車に乗って5分もすると起こる狭心痛に悩まされ続ける日々が続きます。

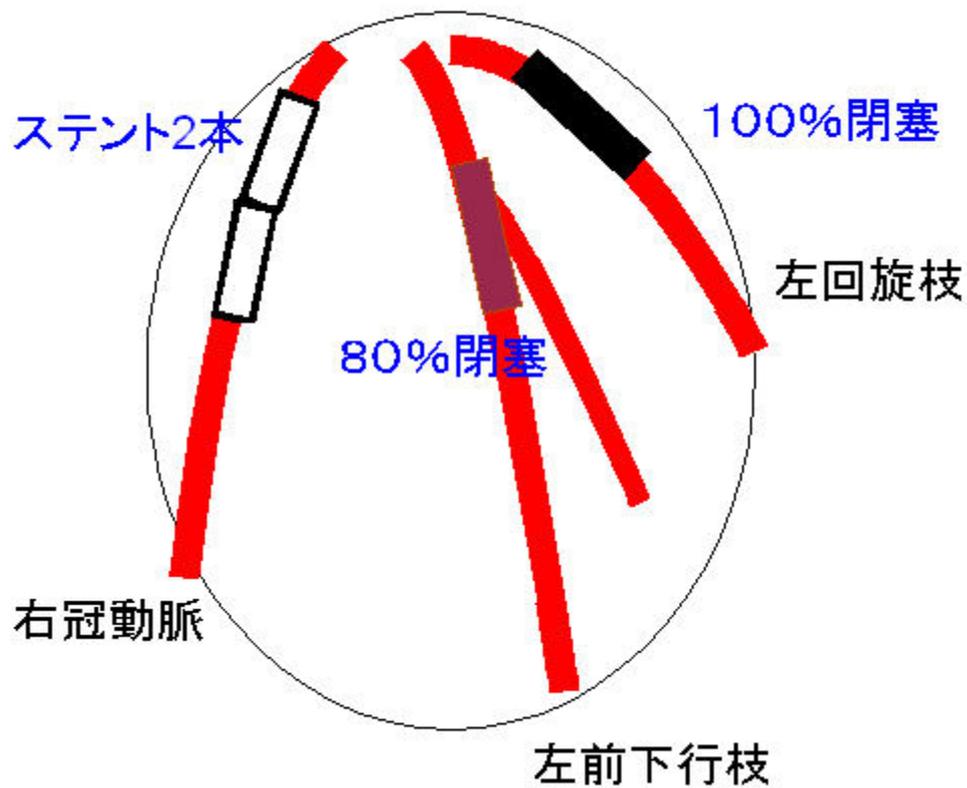
年明けの頃には、妻に肩を揉んで貰っても、数分もするとまた揉んで欲しくなるくらいに酷い状態だったものです。

そしていよいよ容態が悪化しての、緊急入院の日を迎えることとなります。

41歳の春。バカボンのパパの年齢です。

## 第2部

### 入院



のちほど説明を受けたわけですが、最初の手術では、完全に閉塞していた右冠動脈を開通させてステントを2本入れて固定したとのことでした (P.3 参照)。

## 2007年2月8日（木） 前日の容態悪化

朝は気分爽快だったものの、出勤支度中に**にわかに変な倦怠感**に襲われて、いつもの左肩のコリも酷く会社を休んでしまうことにして連絡を入れる。最近の調子の悪さを察したのか妻も特に反対はしない。そのまま、だらだらと寝室で横になって携帯ゲーム。

昼に起きてPCの前に座るも、**手足がひどく冷たい**。自室にエアコンの暖房を入れてぬくぬくすると、やがて少し気分が晴れてきたのでそのままだらだらPCの前で過ごす。しかし引き続き食欲はなく、14時頃に今朝妻に作って貰った弁当箱を開けるも、1/3も手つかずのままで、妻に返してしまう。

それからまた寝室で少し寝ると気分が回復したので、起きてスコーンをつまみ、そのまま一袋あけてしまう。しかし、その後に再び気分が悪くなってきたうえに、今度は部屋を暖めても回復しなかったので露骨に間食を後悔しつつ、また寝室で横になる。

また起きてPCの前に座るうち夕方になる。PCの前で立ち上がろうとした際に、いつもの左胸の圧迫感とともに、かつてないほどの激しい目眩が起こり**目の前が真っ白**になる。慌てて椅子に座り直すも全身からどっと**激しい脂汗**が出る。そのまま数十秒かを椅子に座るうちに、眩暈は治まって持ち直してきたが、基本はふらふら。

後日の墨東病院の医者によれば、このときに血栓で太い血管が詰まったのだろうとのこと。

こらあかんとPCを落として、今日はもうそのまま寝室で横になることにする。やや熱も出てきたようなので、妻に「熱さまシート」を所望し、額に貼って寝る。

何時間かすると「熱さまシート」の薬の臭いにムカムカして**吐き気**がして目が覚める。胃の中のスコーンを吐いてスッキリしようかと台所の流しで苦悶するも、結局、吐けず。当然、夕食などはまったく口にできずに、再度そのまま布団に入る。左手は相変わらずの痺れっぱなしでもある。こらあかん。明日朝になったら坂本病院に行こう。1時就寝。

この日のmixi日記は、よもや翌日に緊急入院する羽目になるとは思っていなかったものの、この割と酷い状況をそのままつづっているの、いま読み返すと「やっぱりね」な感じ。

## 2007年2月9日（金） 緊急入院

朝の7時過ぎには目が覚める。調子が良くないので今日は会社を休んで坂本病院に行く、朝食もいらないと妻に伝える。とくに異議を述べない妻。

当時の mixi 日記には、こんな風に書いていました。木・金と休んで月曜日が休み（振替休日）で5連休になるんですね。すでに自覚症状まんまんでギャグを飛ばす余裕もなし。

### 嬉しくない五連休 2007年2月9日 8:34

さすがに睡眠が足りているので夜中に目を覚ましたり。

とりあえず労作狭心症にはもう何年かつきあってきたが、自発狭心症に移行しつつあるようなのがヤバいんだよねー。あと今回ののは、いつもの狭心痛だけでなく目眩や吐き気を伴っているのがちとヤバいんだよね。

何はともあれ、今日は朝から循環器科のある新小岩の医者に直行することにする。

少なくとも午前半休は確定。会社にメール。

たぶん午後も休むことになるだろう。

これで五連休は、まったく嬉しくない。

やっぱ人間、健康が一番大事だよなあ。

9時からの開院に合わせて mixi 日記を書いて、8時半過ぎに家を出る。

しかしここで、普段ならば駅まで自転車で行くところを「**運動不足解消**のため歩いて」坂本病院まで行くことにしたのだが、しかし実のところ、5分も歩いていたらしんどくなってきたのでこれは露骨に後悔。

実は心筋梗塞の発症後に自分で歩くのはかなり危険であることが後で判明したので、これはかなり身体を張ったギャグならぬ自殺行為であった。

それでもやがて坂本病院に到着。保険証と診察券を出し、循環器科の診察を依頼する。結構ふらふらのまま、それでも携帯ゲームなどして待合室で待つ。

やがて自分の番になり、問診開始。相手は院長でも専門でもない若い医師だった。

現在の体調不良を、昨夜の酷い目眩なども含めて一通り訴える。こちらとしてはせめて「血液サラサラ」薬の処方などを向こうから言い出すことを期待していたわけなのだが、

先方としてはこちらが年末のJ病院をドロップしたことも聞いており「さてどうしたものだろうか」という感じの対応。

ともあれ心電図を取って採血を行う。採血の結果は10日後に分かるのでまた**10日後に来い**と言われ、会計のため待合室で待つ。

今から見ると、ほとんどもものすごいギャグである。これに従っていたら多分10日後どこか当日か翌日には死んでいたと思う。

しかし、どうやら向こうで動きがあったようで、看護師から「すぐに結果が分かる採血を改めて取ります」と呼ばれたため、再度の採血に応じる。おそらく、先の若い医師が院長に相談したのであろう。

さらに少し待って、院長がいる内科室に呼ばれて入る。

院長先生とは初対面。改めて症状を簡単に説明すると、即座に院長は「心筋梗塞ですね。**ただちに緊急入院**しますのでご家族の方に電話をしてください」と断言。

ちょうど携帯の電池が切れたので目の前の病室の電話を借りて自宅に電話をして、要件を妻に伝えて院長先生に電話を返す。

入院先はJ病院か墨東病院をと言われる。J病院をドロップしたことと墨東病院は近い（実はこの時点では名前を知らなかったのだが）ということで、墨東病院にすることに。院長は目の前でただちに墨東病院に電話をかけ、これから心筋梗塞1名入院させることを手配する。

こういう決定がただちに下せるのがやはり院長というものだろう。

（妻コメント）それにしても心筋梗塞と見抜いて手続きをしてくれた地元病院の院長先生には生涯頭があがりません。フォロワーさんのご身内で働き盛りの旦那さんがある朝突然冷たくなってたという話を複数聞くと下手したら翌朝に未亡人になってたんだなあと思うと本当に無事でいてくれてありがたいです。

続きは妻が来てからということで、待合室で少し待つ。

## ERに自分の足で歩いて入る

妻が来たので再度内科室に入って院長の話を伺う。基本的にはただちに入院という確認。墨東病院へは救急車とタクシーのどちらにしますかと聞かれたので、救急車はお断りしてタクシーで行くことにして、精算をして紹介状を貰って坂本病院を後にする。

しかしこの時点でもまだ普通に歩いている私は、そのまま妻と駅前まで歩いて、交差点でようやく拾ったタクシーに乗り、正午に墨東病院に到着。

(妻コメント) 夫を送り出した後、晴天だったので布団を干していたら電話が鳴って急ぎ自転車で病院まで駆けつけました。正直なところ親族で心筋梗塞をやった人が皆無なので病院で説明されても今一つ??でした。

車中では「いやあ、やっぱ調子悪かっただけのことはあったなあ」とか妻と話す。

そしてタクシーは墨東病院に到着。ERに入るための受付を済ませて、さらにERの前へ。そこから室内に入るようにと音声による指示があり、TVドラマで見たような鉄の分厚い観音開きの扉が外に向けてごごごごと大きく開く。「ご家族は外で」とも言われたので、妻を廊下に残したまま「んじゃ、行ってくるよ」と言ってERに入る。

ERに入って、入り口の扉が閉まるなりベッドに横になるよう指示されたのでそうする。しかし**横になった瞬間に**スタッフの数人がぐるりと私を取り囲んで作業を開始した。すなわちてきぱきとこちらの眼鏡を外し、服を脱がし、鼻に酸素チューブを入れ、採血をして、剃毛をして、尿道カテーテルを挿し、大声でこちらの名前を呼びかけて復唱させる。こちらとしては、気落ちはしていたものの意識はハッキリしていたので、大声で呼びかけられるのにも戸惑い「**え? え?** そんな大ごとなのか?」でされるがままに。

いや、確かに心筋梗塞は大ごとなんだし、ERの対応としてはまったく正しいんですが。

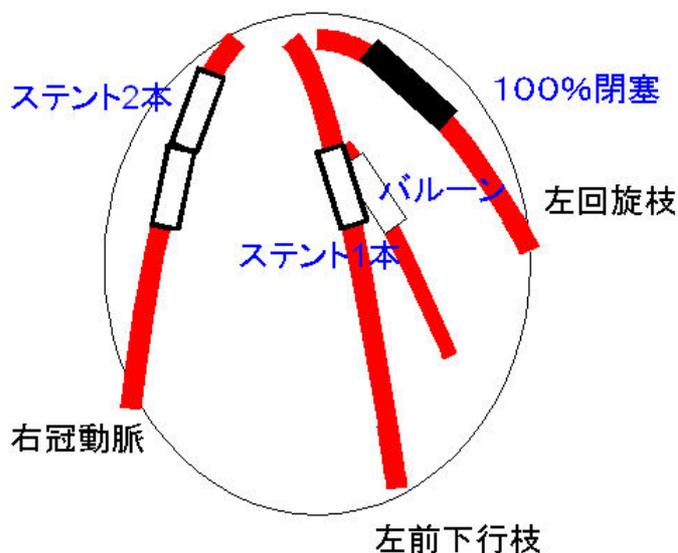
後に「**ERに自分の足で歩いて入った患者**」と看護師の噂にもなったらしいです。

自分がそういう状態だったので、手術の同意書は妻が書きました。

## 2007年2月21日（水） 再手術

三度目の延期はなく、再手術は無事に完了しました。

今度の手術は、80%塞がっていた左前下行枝の開通です。（P.9 参照）



カテーテルは鼠径でなく腕から通したので、術後は月曜の検査と同様、手首の止血を待つだけの簡単なものであり、明日問題が出なければ明後日には退院の運びになりました。

**退院日決定しました 2007年2月21日 20:51**

こんばんは嫁です

本日ようやく手術終了&成功です。

で、先生に言われたことですので確定と思いますが退院は金曜日の午前中になりました。何とか今週中に家に戻ってきます。

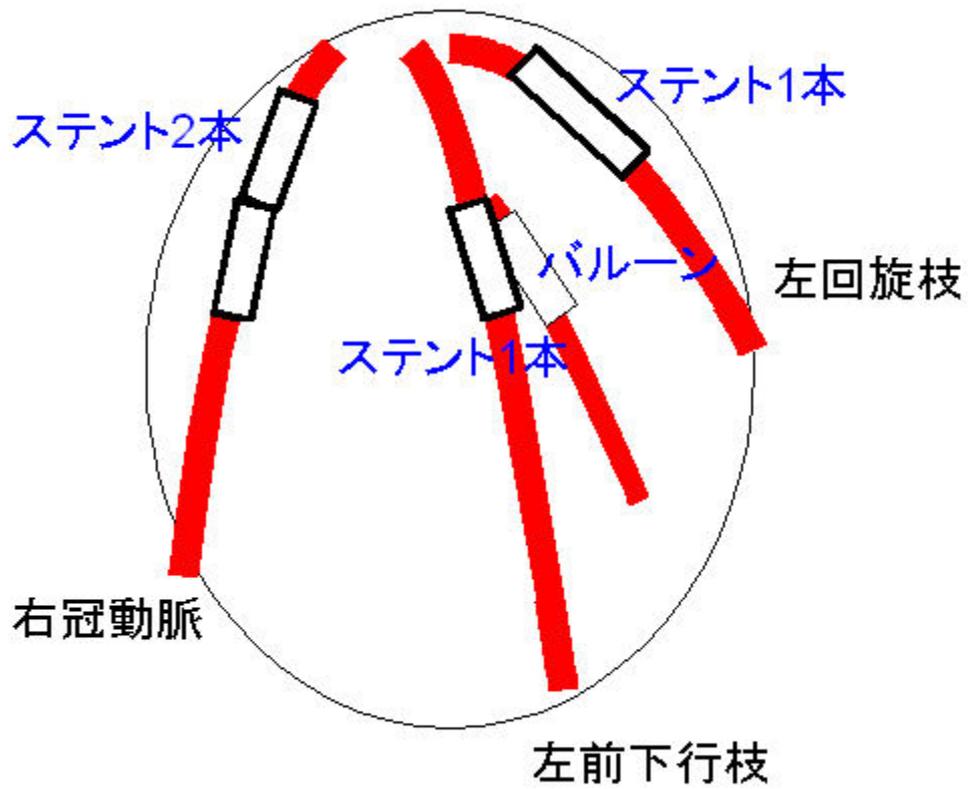
脚の付け根から管を通さなかったのが勝利のカギでしょうか。

それと2, 3ヶ月後に今回やらなかった以前に詰まらせていた部分を改めて治すらしいのでその時はまた休職なりお休みなり貰うことになるでしょう。

この入院生活で脚の筋肉ははっきりと落ちているのでまずはゆっくり近所を散歩したりして体力の回復に努めて欲しいものです。「金曜に退院なら土曜にマジックいけるかな」なんて言うのですがさすがにそれは無理だろう…常識的に考えて。

## 第3部

### 最終手術と、その後



3度目の最終手術で、左回旋枝を開通させて完了。

自分は量はともかく美味しいものを食べる生活を止めるつもりはまったくなく、何か特に運動をしているわけでもないのに、また何年か後に再手術することは避けがたいようにも思えますが、できれば深刻な事態に至らずに済ませたいものですね。

心筋梗塞は脳梗塞と違い、生活に影響の出る後遺症に悩まされることはほとんどないのが幸いというものです。もちろん何の病気にもかからないのが一番なのですが（笑）。いずれにせよちょっぴりのお金さえあるなら、あとはオタク人生を楽しめるだけの健康が一番ですよ、と結びたいと思います。

(完)

## 謝辞

本書の基本的な内容は、当時 mixi で「友人の友人まで公開」設定にしていた自分の日記であり、特に自分の入院後は、自分の代理で妻が報告を行ってくれました。

このため当時の日記には、皆さまからの温かい応援コメントをたくさんいただきました。これは入院中も、自分の大きな励みになりました。

本書ではコメントの掲載は見送らせて頂きましたが、以下の方々（当時のハンドル）に、ここで心からお礼を申し上げたいと思います。

abee ardbeg1958 GROBDA MAT potch ROCKY ryu ryuu SARU  
T.OKANE teru undo あかつき あきやま アラジン 石黒直樹 うえきた うきゃ  
エメット・T おがわ 和尚 おでっさ きょうこ 佐藤痴庵 酸性猛獣 しんく しんじ  
すばる せんと 高橋 でんでん 速水螺旋人 ベっきい まこと～ 柘田省治 まりも  
みかん 水瀬 みちゃ みのうら 桃子 モロー 湯 ラクメキアソーさい らぶうさ

(五十音順・敬称略)

## 心筋梗塞入院記 (v1.00)

発行者：ひろじ <https://twitter.com/kondohi>

発行日：2017年12月29日

印刷所：日光企画

本書の文章や写真などの無断転載を禁じます

筆者（ひろじ）について：

<https://twitter.com/kondohi> （ツイッター。最近はここメインです）

<http://otakutalker.diarynote.jp/> （ダイアリーノート。マジック関連はここで）